

垂水史談会報

2019(令和元)年
8月発行 垂水史談会
第36号

【報告】

- 4/20(土) 総会・市民館(講演:上園正人氏)
- ／26(金) 県文化財保護指導員研修会(県民交流センター)
- 5/28(火) 大隅地域文化財保護審議会総会(垂水市民館)
- 6/30(日) 大隅史談会理事会(ホテルこばやし)
- 7/8(月) 第1回垂水市文化財保護審議会(文化会館)
- ／10(水) 《県民の日》キャンペーン:垂水島津家資料の一部を展示(図書館)
- ／19(金) 垂水史談会理事会(文化会館) ↓今年度
研修先を出水の武家屋敷を候補とする。
- 8/4(日) 『戦争のあったころのことを知ろう』・図書館展示
／8/23

令和元(平成31)年度

―― 垂水史談会総会開催 ――

平成31年4月20日、垂水市民館において、平成31(令和元)年度垂水史談会総会が開催され、平成30年度の経過報告、決算や、平成31(令和元)年度の計画、予算案が承認されました。

総会終了後には、中国近代史研究会事務局長の上園正人氏から『島津貴澄とその時代―垂水における文芸興隆を中心として―』と題して講演がありました。

【講演の概要―上園氏のレジュメより】

江戸期、垂水において文芸が大いに興隆した。それを推進したのは十代垂水領主島津貴澄と九代島津貴儔の庶子末川周山であった。前者は漢詩・漢文を、後者は和歌・和文を中心に大きな役割を果たした(ちなみに県立短大の教授橋口晋作氏は「周山は、貴澄の文化政策の補欠を試み始めたといえよう」とのべておられる)。

I 島津貴澄の文教政策

①島津貴澄(1738～1807)について

初めの名は貴澄、字は玄淵、のちに元直、字を温之と改める。豫章と号す。島津吉貴の第五子。生まれてすぐに実兄貴儔の養子となる。宝暦十四年(明和元年(1764))、幕府より賜物のあった島津重豪に代ってお礼言上のために江戸へ赴き、將軍徳川家治に見える(貴澄にとって生涯1回だけの江戸訪問↓『廢籠詩稿』に詩あり)。安永四年(1775)、貴儔を嗣ぎ垂水領主となる。安永五年(1776)、文行館を創設。安永八年(1779)十月一日の桜島大爆発の際、被災民の救済に尽力(天保九年(1838)、島津貴典の命により伊地知季虔が『桜島燃記』を著し、貴澄を顕彰)。安永十年(1781)、九州遊歴中の市川鶴鳴に「桜島焼亡塔」碑文委嘱。寛政十二年(1800)、漢詩集『廢籠詩稿』を編輯。享和三年(1803)、家督を貴品に譲る。文化四年(1807)、死去。享年七十。交流のあった儒者向井友章は島津貴澄を「溫柔敦厚(温厚従順で人情が厚い)」と評した。

②乾微猷・市川鶴鳴の招聘

a) 乾微猷: 讃岐丸亀出身の儒者。名は冠太(官太とも)、字は君象、号は文溟。のち名を周左衛門と改める。荻生徂徠門下の大内熊耳に学んだとする記述もあるが、確認できず。貴澄に仕え始めた時期について、市史は「明和九年(1772)」

【お知らせ】 ― どなたでもご参加ください ―

毎月第四水曜日午後六時半から、垂水市民館で垂水の郷土史や文化財などについて、定例の勉強会を行っています。『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、資料を持ち寄ったの勉強も行っていきます。また、市内に残る文化財や史跡めぐりなど、現地研修を行うこともあります。

とする。乾家系図に基づくものと思われるが、乾撰の「垂城修手貫祠記」には安永二年(1783)八月に垂水にやって来たところある。安永五年に文行館が創設されるや、教授となる。安永八年(1779)、貴澄に「対策」を上呈し、困窮農民の救済策を論じた。同九年(1780)、文行館学頭となる。約三十年ほど子弟の教育に勤めた。晩年、故郷讃岐に帰る。

b) 市川鶴鳴: 高崎藩出身の儒者。名は匡、字は子人、通称は多門、号は鶴鳴。垂水の家老職にあった際は左大夫といつた。大内熊耳に師事。九州を遊歴して出て出会った島津貴澄に依頼されて安永十年(天明元年)、「桜島焼亡塔」碑文を撰する。天明四年(1784)のことと推測されるが、正式に貴澄に招聘される。文行館経営にも力を入れたという。ちなみに市史下巻に「治国の要は教育なり」と家老市川左太夫に命じて、学校を創設せしめた」とあるが、当時市川はまだ垂水にいない。家老市川が打ち出した財政再建策が強い批判を受け、天明六年(1786)退役させられて、垂水を離れる。市川は多くの著作を残しているが、垂水在留中の著作として「南中独語」「君道篇」などがあつた。しかし市川に関する文書・記録も含め徹底的に廃棄されるなどして、ほとんど残されていないという。

③文行館の創設

a) 創設の背景

- ・ 造士館創設(安永二年(1773)) ↓ 教育・学問を奨励する気運の高まり
- ・ 貴澄: 漢詩に興味を持つ実父吉貴の影響(橋口晋作氏の指摘)

b) 「文行館」名称の由来

『論語』述而篇の「子以四教、文行忠信(子、四つを以て教う。文、行、忠、信)。(岩波文庫版参照)の「文行」に基づくか? 孔子が教育において重視した四つもの。文は読書、行は実践、忠は誠実、信は信義。

c) 運営内容

- ・ 学校経費: 一切領主が負担
- ・ 教員: 記録奉行および勘定奉行等の内から兼務、員数五名以内、定番一名
- ・ 生徒: 士分に限る、年齢十歳より入学、数は百名以内、自費生
- ・ テキスト: 孝経・小学・四書五経・近思録・諸子百家の書・史書など
- ・ 一日の授業内容: 素読↓習字↓復読↓精書↓退室

d) 関係者

- ・ 垂水
- ・ 乾微猷・市川鶴鳴: 前記参照
- ・ 郡司綱光(郡壁): 郡司喜兵衛、字は潤夫、号は玄圃。文化四年(1807)、文政十三年(1830)に文行館勤務の記録あり。貴澄の『廢籠詩稿』校訂者の一人で、垂水知文行館事として「書廢籠詩稿附録後」を記す(文化八年)。内田昌貞・梅本実先・橋口兼定・川上親胤ら
- ・ その他
- ・ 『垂水市史』上巻(昭和49年)より

「島津貴澄は」特に民風を振興するには文教より善きものはなしと考えて本藩から向井友章、黒田為国等の儒臣を招き（当時市来源右衛門、伊地知小十郎等の文臣と絶えず往来したとのこと）…」

・向井友章：諱は友章、字は達夫、号は滄浪・賀山人。昌平黌で学んだ後、帰藩して御薬園奉行格となる。その後大島付役を勤める。島民に苛酷な役人を批判し、「清風」を心掛けた。のちに門人・米良則文・新納時升らが役人として島に赴く際に清風のことを話して送り出した。のち官を辞めて家塾を開く。文化九年（1812）病没。

e)終焉

・島津貴典↓学問不振を歎じて監督（梅本実先が担当）を置く（弘化四年〔1847〕）

・明治維新まで存続

↓明治二年（1869）十二月、高崎正風、垂水学校創設。『学則』を著す

④『廢簾詩稿』編輯

・寛政十二年（1800）の島津元直温之（貴澄）の序あり。

この時「廢簾詩稿」として編輯。上梓の希望はあったかもしれないが、序文で人に示そうと欲したものではなく、自ら笑楽に供するだけであるとのべている。

編者伊地知季昵の序文に「貴澄」詩賦を作るを好む。故に邑中の士、靡然として之に従う。上の好む所、下必ず之に従う」とある

II 加治木領主島津久徴との比較

島津久徴（1752～1809）

・毓英館創設（天明四年〔1784〕）久徴の父は島津貴澄の実兄継豊の子、久峰（知覧領主となる）

↓儒学者山田君豹・郡山元賓らと交流。造士館創設以前に知覧に「胥倣館」創設。造士館の創設は久峰の献策であるともいう。漢詩集『毅斎遺稿』残す。

・自作の漢詩集『名山楼詩集』『名山楼集二編』『名山楼詠物百首』刊行

**『名山楼集』は島津貴澄『廢簾詩稿』編輯に刺激を与えたという

・家臣たちの著作（特に和歌）は現在ほとんど残らず
—おわりに—

島津貴澄の業績

・文行館を創設し、人材育成に尽力↓貴澄の没後、続々と成果現れる

・乾徳猷・市川鶴鳴ら藩外の人材採用や本府の儒者（向井友章など）らとの交流

・漢詩を詠むことを好み『廢簾詩稿』編輯

↓家臣等の文芸志向生む（上の好む所、下必ず之に従う）

【研究ノート】

「前田直治墓」墓碑銘 (2019.3.31 確認 瀬角龍平)

西南戦争に新城郷から西郷軍として出陣し、鹿児島島の武村で戦死した前田直治氏の墓碑銘である。墓石は、旧国鉄大隅線新城駅跡の東側の末川家墓域の近くに存在し、横たえてあったもの。墓石には側面に漢文が記されている

【転写】

(正面)

前田直治墓

(左面)

明治十年旧五月二十四日於

鹿児島武村而戦死義

父同十一年四月九日収其遺

(背面)

體而帰因埋之於茲土

云

(右面)

行年二拾六歳

【読み下し】・左面から

明治十年旧五月二十四日、鹿児島武村に於て戦死。義父、同十一年四月九日、其の遺體を収めて帰り、因つて之れを茲の土に埋むと云ふ。

行年二拾六歳

(高さ…60.0cm 縦、横とも24.5cm)



—たるみず春秋—

投函の後の推敲戻り梅雨

寺山 紀子

自分の作品を投函した後に、推敲し直してみても、こっちのほうが良かった、また、もう少しこんな風にしたら良かった、と考えたことが誰にもあるのではないだろうか。私なども同類で、出来ることなら郵便局員にポストを開けて貰って修正したいと思ったことは枚挙にいとまがない。もしない人がいたら相当な自信家なんだと思え。

戻り梅雨という季語によって、不完全なままで投函してしまったという揺れ動く雰囲気がよくわかる作品である。

(文章・瀬角龍平)